

## 紫香楽・伊賀の焼き締め(1)

いよいよ紫香楽です。今までも信楽やってきましたが、今回は炭化焼成することで、より穴窯で薪で焼いた雰囲気が出せるようになってきました。

特に炭化を2回繰り返したものの地肌は、まさに紫香楽です。

「ざんぐり」という言葉が信楽の焼き締めの作品によく使われます。少し「ざんぐり」していますね。

そして、伊賀。伊賀も信楽も土は同じなので、焼き方が変わらなければ、同じものになります。

今回、作るものは自由ですが

おすすめ① 以前もやった「蹲る」の花入れを炭化で再挑戦

おすすめ② 伊賀風の耳付きの花入れを、自由闊達に再挑戦

おすすめ③ ゆがみ鉢等



以前やった「うづくまる」



炭化1回



炭化2回  
石が溶けて丸くなった！

耳付き花入れ  
もっと形を崩してもOK！



破れ袋



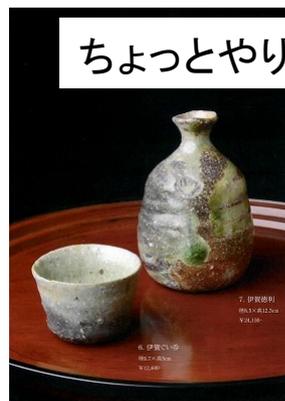
しぶーい ゆがみ鉢とか茶碗



こういう鉢もよい

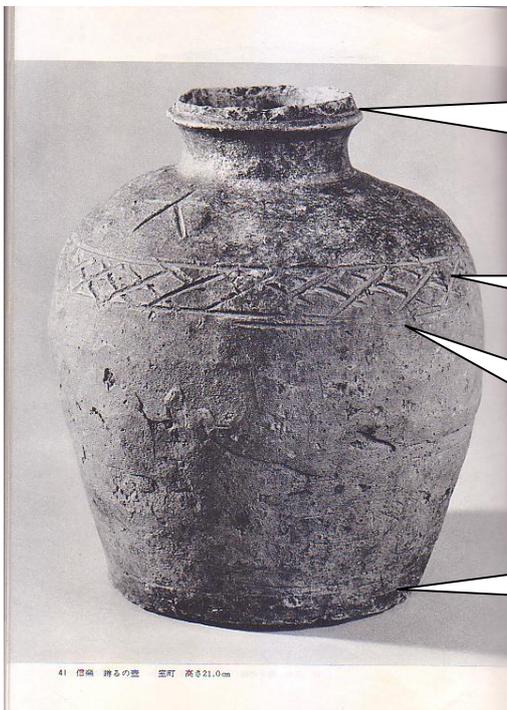


ちょっとやりすぎ！？の作品



## 紫香楽・伊賀の焼き締め(2)

信楽は紫香楽とも書きます。かつて、信楽に日本の都があった時は、「紫香楽の宮」と書かれていました。格好いいので、こっちでいきましょう。紫香楽のものというとはやり壺などが有名ですが、その中でも「蹲る(うずくまる)」という異様な名前の壺が花入れなどでお茶の世界で用いられてきました。本来は種壺として作られたと言われています。作品自体は実に大らかなものです。削りもほとんどありません。ざっくり作って、ざっくり楽しみます。本来は高さ20センチほどですが、小さく作ってもかまいません。ざっくり感を楽しみましょう。



「二重口」理由はわかりませんがこの形になっている口が多いのです。余裕があれば見ながら挑戦してみてください

「檜垣文」これは紫香楽だけにある文様です。どうみても適当にやっているとしか思えない大胆な模様です

「蹲る(うずくまる)」形人がうずくまっているような感じを受けるようなずんぐりとした形

切りっ放しの底切りっ放しで終わりです。削りはほぼなし実際は「下駄印」と言われる跡があった

サンプルをよく見てください。3種類あります。紫香楽の特徴は本来穴窯で薪で焼かれたために起こる物ですが、それをできるだけ土で再現しようと3種類用意しました。好きなパターンで攻めましょう

パターン1: 白さ追求 荒土70 信楽白土 30

紫香楽は、灰のかぶっていない部分は基本真っ白です。それを重視

パターン2: 緋色追求 荒土70 赤土 30

緋色がきれいに出るかなと思い、赤土を混ぜたもの。

パターン3: こげ追求 荒土70 赤土20 黒陶10

薪の焼け残りがたまり、地肌がすすで黒くなっている感じをだそうと黒陶を混ぜてみました。鉄分により土灰の緑がきれいに出やすい。

## 紫香樂・伊賀の焼き締め(3)

### 蹲るを作る

サンプル程度(500グラム)・・・ろくろは2周あたりを目安。底は1センチ。

- ①適当にまっすぐ積む
- ②上部を寄せ、柄コテ小がはいるくらいまでに口を縮める
- ③柄コテでうずくまるように膨らませる
- ④口をすぼめる。お好みで2重口、檜垣文を入れる

種壺サイズ(高さ20センチ)・・・大体2キロほど

ろくろ3～4周。底が広いと、ずんぐり、せまいとすっきり、  
基本的には、上と同じ。サイズが違うだけ。

### 水差しを作る・・・2キロ



・基本的に、ろくろ3.5～4周を目安に円筒形を作ります。  
蓋受け部分は、口を厚く作り、松刀刃を使って、内側を  
平らにするだけで十分。

蓋そのものは、たたらで作ってしまいましょう。

厚さ8ミリほどでたたらで円を作り、松刀刃で、模様を入れたり  
部分的にひもをのせたり、手荒に削り取りましょう。

### 耳付き花入れや破れ袋を作る・・・1.2～1.5キロ

・基本的には壺と同じです。ろくろ2.5～3周を目安に、少し厚めに  
ひもを積んでいき、口を少しだけ閉じます。

・柄ゴテで、内側から膨らませます。表面が割れて、裂け目があちこち  
にできるまで広げ、多少ゆがんでもへたれても、そのままにして  
「これでいいのだ!」と言いましょ。

### ゆがみ鉢を作る・・・1.2～1.5キロ

・3周を目安に少し背が高い、鉢を作ります。  
切り離したら、下にひもを2本作ってその上に  
器をのせると自然なゆがみができます。



※その他には、「びろーん板皿」「筒花入れ」が  
お勧め!